



小野寺 純子

GKデザイン機構  
取締役事務長



デザイン

モノに心を見ると人に世界が見える

私が、GKデザイングループというデザインコンサルタント企業に入社して40年が過ぎようとしている。この会社は、卓上しょうゆ瓶からオートバイ、新幹線などの公共交通の数々、そして都市計画や万博、オリンピック等の公共施設まで幅広いデザイン領域を手がけ今年で65年を迎える。創設者であり、会長だった榮久庵憲司氏(故人)の下で、多種多様な仕事に携わることができたのは、私の人生での仕事冥利に尽きる。中でも、国際的に活躍した榮久庵氏のデザイン活動を通し、さまざまな国での多くの人々との出会いは私の宝物である。



1999年オーストラリア シドニーでの国際デザイン会議にて  
ヴィヴィアンナ女史と

1999年にオーストラリアのシドニーで開催された国際デザイン会議で記念講演をされた、「ジョージ・ジェンセン」のヴィヴィアンナ トールン ビューロ ヒューベ女史(故人)との出会いもその一つだ。スウェーデン生まれの女史がパリ在住の1950年代、南仏アレー・ビオでの1960年代、1978年にインドネシアに移られて以後、晩年まで作品を創り続けてきたジュエリーデザイナーとして語った“モノづくり”。デザインしたモノが、それを使う人の美しさを引き出すデザインの役割。モノと、それを使う人との関係を、彼女の人生と重ね合わせて思いを巡らした。その素晴らしい語り口は、会場にいる全ての聴衆の心を魅了し、スタンディングオベーションだったことは、今も語り継がれている。



2014年イタリアミラノでの  
コンパッソ・ドーロ授賞式後の懇親会にて  
左が私、中央が榮久庵氏

一方、われわれモノづくりを<sup>なりわい</sup>生業とするデザイナー集団において、榮久庵氏は、人間は日常生活で道具なしには生活できないことを「モノに心を人に世界を」と説き、デザインという仕事を「道具と人間」という哲学的考察にまで高め、それを「道具論」へと導いた。その心根が、ヴィヴィアンナ女史のデザイナーとしての思いと重なるところに、私が今日までたどってきた自らの仕事の神髄をみる思いがした。

デザインに人生を賭けた榮久庵氏の偉業をしのぶとき、数多くの受賞の中でも学生時代からの憧れだったという、イタリアのコンパッソ・ドーロ賞が最後の受賞となったことが感慨深い。この一枚の記念写真は、先のヴィヴィアンナ女史との写真と共に、私の心に刻まれた最高の思い出である。